

## ロンドン便り '03 : 実利的なやり方

長谷部徳子\*

### A letter from London '03: — Pragmatism? —

Noriko Hasebe\*

\* 金沢大学自然計測応用研究センター, Institute of Nature and Environmental Technology, Kanazawa University

日本学術振興会・海外特別研究員としてのロンドン大学滞在中もあと数えるばかりで終わりを迎えようとしている。数々のことに手を染めていくつかは徒労に終わり、いくつかは今後の発展待ちであるが、現時点で比較的良好とまとめることができたと思う研究にレーザー溶融 (LA) ICP-MS によるウラン濃度測定に基づいた FT 年代測定がある。詳しい内容については現在 (2003 年 2 月現在) 投稿中であるのでその結果を待ちたいと思うが、その中の内容の一部である年代式の展開について、本ニュースレターで紹介しているので、興味がある向きにはご意見をいただければと思う。

昨年号で当ロンドン大学に U,Th/He 年代測定用のための He 測定用の質量分析系が導入されたことを紹介した。その中で、年代決定に必要な U, Th の測定は、共同利用施設の ICP-MS を利用していることにふれた。しかし ICP-MS による分析が、U,Th/He 年代測定だけでなく FT 年代測定にも実力を発揮する、1 台で 2 度おいしい測定器であるとのことで (実際のところ、マシンおよび試料調整のやり方次第では U-Pb 年代測定も可能であり一台で包括的な年代学的研究が可能である) ロンドン大学では自前の ICP-MS 購入に努力している。伝え聞く話では、研究室のスクラップアンドビルドに伴い他大学所属の ICP-MS が放出されるらしい。それを地球科学科でひきとり、当研究室に設置しようという計画がある。日本の国立大学では備品の管理の問題があり、大型機器の移譲についてはなかなかややこしい手続き (適正な理由付けに書類書きなど) があるようであるが、そ

の点イギリスの大学は実務的である。残念ながら私の滞在中に間に合いそうもないが、何もかも手の届く範囲で分析が行える環境になる日も近い。

実務的といえば、一つ驚いた事件があった。私がお世話になっているロンドン大学が日本の大学改革よろしく、他大学と合併するという話があったのだ。日本では、そのような大事件は公になる前に噂があって、プレスに発表になる前に、少なくとも当事者には情報が渡っていることが多いが、ここイギリスでは、まさに寝耳に水のことであったらしくみんな大変驚いて、大学は上へ下への大騒ぎとなった。合併に伴うプラス点マイナス点などを具体的に調査した結果、反対や批判が続出。す



道を挟んだ反対側のキャンパスの建物は美しいゴシック建築。



UCLに植えられた満開の桜。

るとあっさり合併計画が白紙に戻ったのだ！日本のお役所仕事では、動きだした（発表してしまった）計画を白紙に戻すなんてあり得ない。イギリスの機関の腰の軽さにあきれる気持ちがないではないが、メンツなどにこだわらず、実利的に良いと思えば実行し、後で悪いと気付けば後戻りできる潔さは尊敬できる。ちなみに、プラス点マイナス点の調査は非常に具体的で、合併後、誰が同一グループに所属することになるか、そうなったらグループとしてどういう強みが生まれるか、どういう機器を所持することになるか、教育的に広がりが出るか、受験者は増えるか、などなど、名指しのシミュレーションが行われたのであった。そもそも合併予定だった2つ

の大学は、別々の college ではあるが、一つの university に属しており、わざわざ合併なんかしなくてももともとと同じ組織だったのである。一緒にやれば相乗効果を生めそうなグループは既に共同研究を効果的に進めており、合併してもしなくても何も変わらないという意見だった。合併すれば、ケンブリッジやオクスフォードに対抗できる規模の大学になれるというのが、そもそもの合併のアイデアの発端だったようだが、これらの大学はいくつもの college の集合体であることを考えると、階層の異なる二つのものを比較しているということになり、つくづくイギリスの大学の構造の複雑さ（決して理路整然と組織が形成されているわけでない）に翻弄されてしまう。しかしこれもそれぞれの組織にそれぞれの長い歴史があるためであると思うと、懐の深さを感じる。

3年に渡って掲載していただいたロンドン便りもこれで最後となる。噂に伝え聞く日本の大学・研究施設の現状を考えると帰国後のあれこれについて、暗澹たる気持ちになるのを止められない。今回の滞在が、研究会の方や金沢大学・ロンドン大学の面々の暖かいサポートによるものだったことを忘れずに、帰国後もがんばって研究・教育に取り組みたいものである。